

カメラで見つける、あなたの芝居

produced by 小さな映画 xtage

WSの活動内容

1/2

WS開催にあたって

本ワークショップは5日間で行う予定です。

参加をご希望していただいた皆様の中から9名を選ばせていただきます。

今回のワークショップでは参加者の皆様にくじ引きをしていただき1チーム3名ずつ分かれていただきます。

その後、3名の監督が各チームを担当し、3チームに分かれてWSを行わせていただきます。

※チーム編成はWS当日(DAY1)に行います。

(DAY1)WS参加者顔合わせ&芝居実演

当日、WS会場にお越しいただき、顔合わせとこちらで準備した共通の脚本を使い芝居、演出を行わせていただきます。

芝居、演出は、1チームずつ順番に行い参加者全員で芝居に対してのディスカッションを行う予定です。

同じ脚本をベースに異なる芝居、演出を比較することで、新しい『発見』を試みます。

WSの活動内容

2/2

(DAY2)撮影前セクション

初日の芝居実演を受けて、3人の監督がそれぞれ5～10分尺の脚本を執筆し、執筆した脚本や個人への理解を深める時間(ミーティング)を設ける予定です。

※このセクションはチームごとに行い、場合によってオンラインミーティングや体を動かしてのワークショップになる可能性があります。

(DAY3)撮影

監督が執筆した脚本をもとに、撮影を行います。

原則としてロケ地は3チームとも同じ場所です。

カメラマンも3チームとも同じ人間が行います。

撮影した素材を元に、監督が編集し一本の作品にします。

(DAY4)ラッシュ

撮影した素材を、参加者と小さな映画メンバーで観るセクションです。

(DAY5)上映会

完成した作品を、参加者と小さな映画メンバーで鑑賞するセクションです。

@日本映画大学

上映後、各作品・芝居に対してのディスカッションを行う予定です。

Introduction 私たち『小さな映画』に関して About us,smallfilm 1/2

今回、演出家としてWSに参加する杉山、諏訪、伊藤の3人は『小さな映画』という映画制作団体に所属しています。そして、今回のWSはこの『小さな映画』により企画され、開催しようとしています。

『小さな映画』とは？なんなのか？

私たち『小さな映画』とは映画とは何かを思考する場所であり、そこは来る物は拒まず、去る物は追わない場所です。

『小さな映画』がある理由

私たちの多くは大学卒業後、商業の映画制作に助監督として携わり、仕事として、いくつかの作品が生まれていく過程を見てきました。

しかし、実際に映画を制作する渦中に組み込まれてみると、一つの疑問が湧き起こる瞬間がありました。

それは『私たちは何故この映画を作っているのだろうか？』という疑問でした。

一概に全ての作品に当てはまったことではありませんが、
どこかの会社の誰かが作った企画のはずなのに、
いざ現場で制作を行っている私たちには誰がこの作品を映像化したいと願ったのか？その気持ちが見えて来ない。
心から作りたいと思っているのは誰なのか？監督？プロデューサー？いったい誰？
形式だけの企画書を頼りに私たちは作品を完成させようと必死に動きますが、
少なくとも私には
『本気で誰かが創りたいと願った作品なのか？』『仕事(金)のための場繋ぎの企画にすぎないのではないか？』
そんな風に考えてしまう瞬間は何度かありました。

Introduction 私たち『小さな映画』に関して About us,smallfilm 2/2

『顔たち、ところどころ』という映画を見た。

この映画はフランスのヌーベルヴァークの母と言われた、87歳のアニエス・ヴァルダが映画を作るためにフランスを旅するドキュメンタリーだ。

そのシーンの中でアニエスが盟友ジャン・リュック・ゴダールに会いに行く。しかし、結局、ゴダールは出かけてしまっていて会うことはできない。

その時のアニエスの残念そうな表情が私は好きだ。

今から50年前にフランスでは映画の歴史にとっては革命的である。ヌーヴェルヴァークという運動が起こった。

『ヌーヴェルヴァーク』という言葉だけを聞くと物凄い大きな運動のような感じもするが、

でも、それはごくごく小さな家の一室で沸き起こったんじゃないかと思う。

きっと、一つのテーブルに灰皿とコーヒーカップを置いて、みんなの顔が見えるような距離感だ。

だから、アニエスはあの時、あんな表情になったんだと思う。

アニエスの脳裏には若き日々にゴダールやトリュフォーと映画を語り合った光景が今でも鮮明に浮かんで来るんだって、そんな表情に見えた。

映画は必ずしも大きすぎなくて良いと思う。私たちは『小さな部屋』から沸き起こっていくような、そんな映画を信じてる。

それは誰かが創りたいと願った、その人の顔や心が宿っている映画。制作する全員をふるいたたせるような映画だ。そのためにこの『小さな映画』はあります。

天国に旅立った、アニエスやゴダールが喜ぶ映画を私たちは創りたい。

小さな映画 の 活動年表

History

2021年 商業映画の助監督をしていた小林史弥、杉山卓の2名により発足。

短編映画『横須賀ボーイズライフ』『放課後ルイボスティー』をYouTubeにて配信

2022年 短編映画『奈々子のメニュー』をYouTubeにて配信

2023年 長編映画『LOST HOUSES』撮影

2024年 長編映画『2人のギブス』を上映（★TAMA NEW WAVE ある視点部門にて）

長編映画『吸水口』撮影

2025年 5月 短編映画『選挙の日』をユーロライブにて上映

7月 短編オムニバス映画『歳時記-初夏-』をYouTubeにて配信

8月 長編映画『ト書きと台詞と☆』撮影

長編映画『2人のギブス』を新宿ケイズシネマにて2週間にわたり上映

9月 長編映画『糸の輪』を上映（★大阪アジア映画祭 インディ・フォーラム部門にて）

10月 短編オムニバス映画『歳時記-初冬-』を制作中

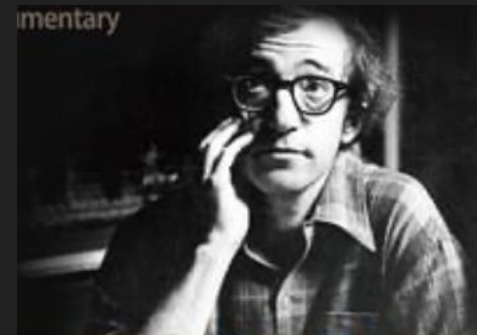
11月 長編映画『糸の輪』を上映（★TAMA NEW WAVE ある視点部門にて）

企画理由 Reason for planning

Prologue 何故？映画のWS(ワークショップ)を企画したのか？

『小さな映画』のメンバーの1人から「WSをやってみないか？」という声があがり、その瞬間、確かに『ワクワク』と高揚する感覚がありました。

このワクワクはなんだろう？
私たちがWSをしたらどんなものが生まれるんだろう？



だから、**私たち【小さな映画】が WSを行う理由** に向き合ってみました。

私たちは何故？映画のWSをするのか？

- ①: 私たちは未知の役者と遭遇したい
- ②: 私たちは演出する『場』を欲している
- ③: 自分たちの名刺になるような映像を **映画として** 残す必要性

企画理由 Reason for planning

理由① 私たちは未知の役者との遭遇したい

私たちの周りには映画を作りたいという仲間は多いです。

一方で、映画の中で演じたいという役者の仲間が欲しいなと思ったりします。

例えば、シナリオなど書いていると頭の中で誰が演じるだろうと想像することがあります。

ただ、脚本の中の顔が振り返った時、その顔はのっぺらぼうだった、なんてこともあります。

誰が演じるかを想像しながら、シナリオを書くのは楽しいと思います。

そういう私たちの映画に出てくる仲間を探しています。

また、**演者の中にある面白さを発見したい、遭遇したいという好奇心** もあります。

よく演技が上手いという表現がありますが、そういうものは無いと思っています。

それは、演者が演じることができる演技の幅、尺度によるものなのではないかと考えるからです。

私たちは幅よりも、その人が生まれて、その人が生きてきた痕跡と遭遇したい。
そんな気持ちでいます。

おせっかいかもしれませんが、
私たちが関わることであなたも知らなかったような魅力に出会うこと。
それは楽しい瞬間だと思います。

そんな瞬間に立ち会うことを欲しています。



企画理由 Reason for planning

理由② 私たちは演出する『場』を欲している

今回、演出で参加する、杉山、諏訪、伊藤は全員
商業や自主映画で演出部という部署で仕事を経験したことがあります。



ただ、演出部という部署ではありますが、
演出の最終決定権は監督にあり、実際に演者とコミュニケーションをとり、
演出をする機会というものはほとんどありませんでした。

現実ではそのような『場』が誰かから与えられることはありません。

他力ではなく、自力でそのような『場』を作らなければいけないと感じています。

何かを上達する術として経験に勝る勉強はないと思っています。

この『場』が私たちが演出することを鍛錬する『場』であり、
同時に参加者がカメラを通して自分の演技を再認識する『場』になることを信じています。

企画理由 Reason for planning

理由③ 自分たちの名刺になるような映像を 映画として残す必要性

今回のWSで行ったお芝居は
メイキングとして、また一つの短編作品として記録しようと考えています。

なぜなら 映画として、記録することに 一つの価値が生まれる と思っているからです。

私はこれまで何度か、第一線で活動する映画監督の演出をこの目で見てきました。
その演出による変化は多種多様なカタチがあったと思います。

しかし、いまそこで何が起こっていたかを振り返ると鮮明には思い返すことができない。
なんだか、それは勿体無いことのように思えます。

今回のWSで

行ったことを そこから 生まれたものを

映画というカタチで残す。



その映画が 私たちにとって、あなたたちにとっての
振り返る場所になり、一つのポートフォリオになればいいな と思っています。

自己紹介 Profile SUGURU SUGIYAMA



杉山 卓(スギヤマ スグル)
1997年9月20日生まれ 28歳
静岡県静岡市清水区出身
日本映画大学演出(監督)コース(2020年卒)
大学卒業後、助監督として
今泉力哉監督・中江和仁監督に従事
2021年に映画制作団体「小さな映画」を設立

<演出部としての参加作品>

「ブレイブ・群衆戦記-」2021 本広克行監督 制作部インターン 「きのう何食べた?」 2021 中江和仁監督 演出部 「TANG」 2022 三木孝浩監督 演出部 「窓辺にて」 2022 今泉力哉監督 演出部 「トークサバイバー3」2024 河合勇人監督 演出部 「いきなり婚」 2025 明石広人監督 演出部

<好きな映画・ドラマ>

- ・「マッチポイント」(2006)ウディ・アレン
- ・「カップルズ」(1996)エドワード・ヤン
- ・「セールスマン」(2016)アスガー・ファルハディ
- ・「チャレンジャーズ」(2023)ルカ・グアダニーノ
- ・「スパイダーバース1・2」
- ・「ホエール」(2022)ダーレン・アロノフスキー
- ・「The Bear」(ドラマ)
- ・「コンパートメントNo.6」(2021)ユホ・クオスマネン
- ・「RAW-少女のめざめ-」(2021)ジュリア・デュクルノー
- ・「ゼアウィルビーブラッド」(2008)ポール・トーマス・アンダーソン
- ・「秘密の森のその向こう」(2021)セリーヌ・シアマ
- ・「コロンバス」(2017)コゴナダ
- ・「私は最悪」(2021)ヨアキム・トリアー
- ・「人生はビギナーズ」(2010)マイク・ミルズ

<これまでの作品>

・『横須賀ボーイズライフ』(2021) 6分

<https://youtu.be/i4AfJINpbs4>

小さな映画を設立し、初めて作った作品。
iPhoneで撮影しました
夏と花火と恋と缶蹴りの話



https://youtu.be/IGQ0_PD0624

吉田篤弘さんの短編小説に感銘を受けて撮った作品。

自炊をしたことのなかった女性が、隣の部屋から香る匂いを頼りに、夕食のメニューを決めて自炊するようになる話。インスタで美味しそうにご飯を食べている写真を投稿していた高田歩さんにDMでコンタクトを取り出演してもらいました



・『LOST HOUSES』(2023) ※編集中

別れはただの別れじゃない。という思いで撮った作品。

・『歳時記-初夏-』(2024)

https://youtu.be/9NUcn_Z-Zuk

俳句を作句し、そこから書き起こした脚本で撮影した作品。
男が逃げて逃げて、岩に登って泥水すするお話。
自分の初期衝動のようなものが映像になった気がします。
お気に入りです



映画・演出に対する想い SUGURU SUGIYAMA

映画が好きです。

なぜ、映画が好きかというと気持ちいい瞬間にごく稀に立ちあえるからです。

自分が観た時に、心がブチ上がってそのまま 宇宙に行くような映像 を作りたい。

自分が宇宙にいった時、自分の作品を観てくれた人も一緒に宇宙にいて欲しい。 そんな気持ちで映画を撮っています。

芝居に関して、自分が撮影の中で欲しているものは人物や事象に対しての発見だと思っています。

それは多分映画を見ている時も一緒に、赤の他人という関係性から始まる人物(映画が始まった時はいつもそう)を見ていて、気づいた頃には知り合いになっていて、映画が終わる頃には友達になっていることもある。

そんな不思議な現象は、映画の中でその人の個人的な部分を少しずつ発見していくからこそ起こる現象なのだと思います。

もちろん、その現象は脚本家によって物語の意図として引き起こされることもあります。そうした「情報」はきっと「ただの情報」として僕の中に処理されていて、登場人物を知る実感になっていない。

他人からMBTIを伝えられてもその人のことを知ることが出来ない感覚と同じだと思います。

僕のブチ上がる「発見」はきっと脚本の中にはない。

役者の体の細部にあるのだと思います。

道を横断する時、車が来ないか左右を見て確認すること。

自動販売機で飲み物を買った時、飲み物よりも先にお釣りを回収すること。

本を読む時に左利きの人間が右手でタバコを吸うこと。

そうした小さな所作がキャラクターの行動を形づくり、物語を推し進めていくのだと思います。

僕にとって映画とは「発見」の連続です。

その発見の感動を、あなたと一緒に感じたいと思っています。

自己紹介

Profile TAKUMA SUWA 1/1



諏訪 拓磨(すわ たくま)
1998年 東京都生まれ 27歳
2021年に日本映画大学を卒業後フリーの助監督として活動。
濱口竜介、白石和彌などの監督に師事。
2023年から監督、カメラマン、役者として自主映画作品を複数制作。

<主な演出部としての参加作品>

『悪は存在しない』2024 濱口竜介監督
『極悪女王』2024 白石和彌総監督
など

<好きな映画>

「人間ピラミッド」(1961) ジャン・ルーシュ
「肉弾」(1968) 岡本喜八
「オルエットの方へ」(1971) ジャック・ロジェ
「ラヴ・ストリームス」(1983) ジョン・カサヴェテス
「台風クラブ」(1985) 相米慎二
「デカログ」(1990) クシシュトフ・ケシロフスキ
「牯嶺街少年殺人事件」(1991) エドワード・ヤン
「ボンヌの恋人」(1992) レオス・カラックス
「コシュ・バ・コシュ」(1993) バフティヤル・ブダイナザーロフ
「渚のシンドバッド」(1995) 橋口亮輔
「パリでかくれんぼ」(1995) ジャック・リヴェット
「ゾディアック」(2007) デヴィッド・フィンチャー
「ナイト・スリーパーズ」(2013) ケリー・ライカート
「ハッピーアワー」(2015) 濱口竜介

○これまでの作品

『15のメーデー』(2021) 30分 監督
・JPPA AWARDS 2021学生の部 映像技術部門優秀賞
<https://x.gd/DT0eM> (予告編)
日本映画大学7期卒業制作
15歳の夏。両親が離婚してから母と二人で暮らしている花江。あれから2年、母の再婚に納得のいかない花江は、ずっと会っていなかった父に会いに行く。かつて3人で住んでいた家で父親と再会する花江だが、父の口から出た言葉は期待とは違うものだった。



『糸の輪』(2025) 75分 撮影
・大阪アジア映画祭 インディ・フォーラム部門
・TAMA NEW WAVE ある視点部門
<https://x.gd/oOYNh> (予告編)

ENBUゼミナールの卒業制作。寺嶋環監督作品。
大学生の百瀬波留はふと動けなくなることがある。
言葉にならない息苦しさが心と体をバラバラにしてしまうのだ。
ある日、偶然拾った毛糸に導かれ、ひとり編み物をする織さんに出会う。波留はふたりでする「編み物」を通して自分自身と触れ合っていく。現代を生きる若者たちの「身体性」を丁寧に紡いだ作品。



『歳時記-初夏-』(2025) 46分 監督・撮影
https://youtu.be/9NUcn_Z-Zuk (本編)
6人の監督が俳句を詠み、出来上がった句をそれぞれが映画にしたオムニバス作品。
台詞を廃して季節を映すことに挑戦した意欲作。6本の内1本を監督、5本を撮影。



自己紹介

Profile SUNAO ITO 1/2



伊藤沙緒(いとう すなお)

1997年7月17日生まれ。千葉県旭市出身。
桑沢デザイン研究所を卒業後、映像制作会社に勤務
のち、フリーのビデオグラファーとして活動。現在は
ショートドラマを中心にディレクターとして活動中。

＜主な参加作品＞

- ・びじゅチューン(教育番組／制作)
- ・仮面ライダーガヴ(TV番組／オフラインエディター)
- ・トクメイ！(TVドラマ／メイキング)
- ・あたらしい世界(映画／制作)

＜好きな映画＞

- ・「若者たち」(1967) 森川時久
- ・「めし」(1951) 成瀬巳喜男
- ・「プレイタイム」(1967) ジャック・タチ
- ・「ブンミおじさんの森」(2010) アピチャッポン・ウィーラセタクン
- ・「他人の顔」(1966) 勅使河原宏
- ・「狂い咲きサンダーロード」(1980) 石井岳龍
- ・「オールド・ジョイ」(2006) ケリー・ライカート
- ・「奇跡の海」(1996) ラース・フォン・トリアー
- ・「対峙」(2021) フラン・克蘭ツ
- ・「ノーカントリー」(2007) コーエン兄弟

＜これまでの制作した作品＞

・Yan's PV (2025)



友人の手芸ブランドのPVを作成しました。彼女の作品の纏う雰囲気や暖かさを表現するため、ロケーションからスタイリング、細かな動きに至るまでこだわって演出をしました。

・Angela MV (2024)



母校の小学校の廃校が決まり、毎年初詣に行っている小学校の幼馴染と忍び込んで撮影しました。自分の出自を振り返るための記録として撮影したものでしたが、滲み出る自分たちのストーリーや関係性が顕著に現れた、ドキュメンタリーとも違う不思議な質感の作品です。

目の前の花の香りを映像に写しとることは出来るだろうか？

私はNoだと思う。

しかし、その花の香りを描こうとすることで、新たな花の香りを生むだろう。

また、受け取り手の数だけその花の香りは生まれるだろう。

それが、ものをつくる/受け取る という営みの喜びなのではないか。

ここで一番大切な事は、その花の香りを描くために諦めない事だと考える。

どうすればこの花の香りを伝えられるのか。受け取ってもらえるのか。その想像力を、諦めずにいたい。

あなたの描く花の香りを観たい。

互いが描く花の香りを確かめたい。

それを持ち寄る行為が映画を作るという事なのだと考えています。

難しい事を言うつもりはありません。

映画を作りませんか？

あなたの身体が伝えてくれる”なにか”を、楽しみにしています。

まだまだ映画の知識も実績も少ない私ですが、一緒に描き方を模索できたら幸いです。



『秋津温泉』 ©松竹株式会社

Schedule -全体スケジュール-

募集期間 2026.02.26 - 2026.03.31

DAY1

4月4,5日の内1日 WS参加者顔合わせ&芝居実演

DAY2/3

4月6～30日の内2日 撮影前セクション&撮影

※各監督が書き起こした脚本で撮影します

DAY4

5月中の土日のうち1日 ラッシュ上映会

DAY5

スケジュール未定（9月頃） 上映会

募集要項

◆選考人数 9名（年齢は問いません）

◆応募方法 ※ 下記の情報を記載してメールにてお送りください。

E-mail : smallmovie2021@gmail.com

【1】 件名

「小さな映画WS 役者募集」をお願いします。

【2】 本文

- ① 氏名(フリガナ) ※ 活動名可
- ② 年齢
- ③ 身長
- ④ 顔写真（1枚）＋全身写真（1枚）
- ⑤ 過去の出演歴(プロフィール資料や映像作品のURL 等、ございましたら添付御願います)
- ⑥ 志望理由
- ⑦ 自由記入 ※ ①～⑦の他に特筆すべき点やご質問などがございましたら⑦として、記載をお願いします。
- ⑧ ご自身の最も古い記憶をエピソードとしてご記入ください。
- ⑨ WS期間のスケジュール 2026年4月4・5日のスケジュールをお教えてください
※DAY2～4はご参加者様と日程調整を行わせていただき、活動日を決定する予定です。
4月～5月を予定しています
※WSスケジュールが合わない方はご相談ください。